

藤沢周平『獄医立花登手控え』における人間観

Image of Human Being in Fujisawa Shuhei's *Gokui Tachibana Noboru Tebikae*

笠井 哲

福島工業高等専門学校一般教科

Akira Kasai

Fukushima National College of Technology, Department of General Education

(2013年9月10日受理)

Fujisawa Shuhei's *Gokui Tachibana Noboru Tebikae* is the *torimonochō* series solving the case that prison medicine, Tachibana Noboru of *Kodemmachō* is related to a weapon with the prisoner by proud jujutsu. He does not learn the up from an ideal personality through the series and he learns the world and human inconceivability from the people who have got into the social darkness and grow up. Therefore, it may be said that this is the Bildungsroman of the darkness. The purpose of this paper is to consider the image of human being in Fujisawa Shuhei's *Gokui Tachibana Noboru Tebikae*.

Key words: Fujisawa Shuhei, *Tachibana Noboru Tebikae*, Image of Human Being

1. はじめに

藤沢周平(1927~1997)の『獄医立花登手控え』シリーズは、小伝馬町の獄医・立花登が、得意の柔術を武器に、囚人と関係する事件を解決して行く「捕物帳」である。これは、『春秋の檻』、『風雪の檻』、『愛憎の檻』、『人間の檻』の四部作である。

主人公の立花登は、江戸にきたその日に、子どもの頃からの夢がついてきた。それから居心地の悪い叔父の家において、日々の仕事に追われるまま、今後の希望も曖昧になり三年が経ったところから物語が始まる。

江戸に来る前の夢と来てからの現実との間のはなはだしい落差が、いまなお登を苦しめている。しかし、そういう「鬱屈」も若い登にとっては、柔術の激しい稽古で身体を動かせば、解消されないまでも、いくらかは軽減されるのであった。

立花登のかかええる鬱屈は、その若さをすべて覆うには至っていないのである。登の鬱屈は彼を苦しみの中に閉じ込めてしまうのではなく、他者の抱え込んだより大きく激しい苦しみと悲しみに向かって、登をさし向ける。

他者、すなわち犯罪と牢獄と病気と新たな事件により織り上げられた闇の人物の方へ、登は引き寄せられて行く。そこで、立花登は、よりむごたらしく複雑な鬱屈の数々に出会い共感し、自らの卑小さに気づくと

ともに、これから抱え込むかもしれない不幸への身構えを学ぶことになる。この書は、いわば「闇の教養小説」¹⁾と呼べるものである。

さて、藤沢周平の「闇」について、川本三郎は次のようにいっている。

藤沢周平の小説のなかで闇は暗く深いからといってただ人間を押しつぶそうとするだけのものではない。闇は暗く深いことによってむしろ傷ついた男や女たちを守り、慰藉していく。藤沢周平の闇は、つねにこの正と負の緊張のなかにある。単にそこに闇があるのではない。闇は、ひとを恐れさすと同時に、ひとを救いもする。藤沢周平の闇はつねにそうした両義性が藤沢周平の作品世界をきびしく、深いものにしている²⁾。

教養小説(ドイツ語でBildungsroman)とは、「主人公の人格の形成・発展を中心とする小説」³⁾のことである。立花登は、このシリーズを通して、理想の人格から学ぶのではなく、社会の闇に入り込んでしまった人々から、この世と人間の不可解さを学び成長していくのである。

本稿の目的は、この『獄医立花登手控え』における藤沢周平の人間観を明らかにすることである。まず、立花登の登場シーンについて、少し詳しく見ておくことにしよう。

2. 立花登の周辺

先述のように立花登が医者を目指し、東北の小藩から江戸に出てきて三年ほど経ったところから、小説が始まっている。彼は、羽後亀田藩の微禄の下士の次男である。もちろん家は貧しく、上池館という医学所で医学を修めることができたのも、母親が内職の仕事を増やして、医学所に通わせてくれたおかげである。

立花登は、子どもの頃から医者になろうと心に決めている。下士の次男坊の将来は、決して明るくない。

ただ、立花登が医者になろうとした動機は単純で、叔父の小牧玄庵が江戸で医者をしていたからである。この叔父は、幼年の頃から神童の噂が高かったので、きっと江戸で成功しているだろうと登は思っていた。

登は何度も叔父に手紙を書き、江戸に上って医学を修めたいと懇願するのだが、梨のつぶてであった。ようやく、来たければ来てもいいという叔父の手紙をもらい、彼が故郷をあとにするとき、「江戸の方角の空に虹がかかっている気がした」。しかし、彼の期待は裏切られたのである。

だが、江戸に来た登が見たものは、場末のようにうらさびれた町の中にある、だだっ広いだけで古びた家、無口で酒好きで怠け者の叔父、叔父を尻に敷いている叔母、母親に似て美貌だが驕慢な娘などだった⁴⁾。

この三年の間に、まだ若い立花登は失意を十分に味わったに違いない。郷里をあとにしたときの江戸の空の「虹」はとうに消えていた。

登は「見習いの医者」として、浅草御門外の福井町にある、場末の家に住み込んで、うちに居候をおく余裕はないと釘をさす叔母のために家や庭の掃除をし、江戸に着いた翌日から叔父の代参をやり、横着になるばかりのこの叔父に代わって、小伝馬町に出かけて、囚人たちを診るようになった。前途はおそろしく暗いものであった。

立花登は二十二歳である。今のところ、彼のただ一つの救いになっているのは柔術である。神田若松町の鴨井道場で免許取りにまで進み、道場で親友と稽古した後は、気分がすっきりする。この柔術が、牢獄で起こる事件や囚人とのかわり合いで、役に立っている。この点については、

子供のころから修行を絶やさなかった柔術に、鴨井道場で磨きをかけ、免許取りにまですすんだのも、片方にそういう鬱屈をかかえているせいかも知れなかった⁵⁾。

という。

鴨井道場の三羽鳥の一人、といわれる登の柔術は、強いひと言につきる。相手を屈服させるときの彼の腕前は胸がすくようだ。第1巻第1話の「雨上がり」の一編には、早くも登の柔術が出てくる。

そのとき登の指が、喜八の尺沢を把えた。喜八が、咆えるようなうめき声をあげて手を放すのと、登の肱打ちが喜八の陰囊を一撃したのが同時だった。よろめいて、それで掴みかかって来た喜八を、登は片膝を突いたまま肩越しに投げた。

喜八の身体は宙を飛んで、頭から押し入れの襖に突きささった⁶⁾。

登は医者、それも獄医である。獄医と柔術、このユニークな二つの組み合わせが、シリーズの特色である。青年にとって、獄医の仕事など辛気臭いはずであり、立花登もそのことを承知しながら、誠実に囚人を診てやるし、ときには力にもなってやる。

登が柔術に優れているのは、激しい稽古の賜物であるが、そればかりといえない何かがある。それは、藤沢周平作品の主人公たちが、共通して持っている性質である。彼らは、若くても年老いていても、強いだけでなく思慮深いのである。

立花登のそのような性格は、まわりの人たちにも影響を与えずにはおかない。「美貌だが驕慢な娘」のおちえも、登の存在によって、盛り場で夜遊びしていた不良少女から「姿のいい」娘らしい娘に変わって行くのである。

獄に収容されている囚人たちの中には、医者である登に、他の役人などには言えない頼みごとをする者もおり、彼は病人の治療という役目をはなれ、人間的な感情からそれにかかわった結果、意外な事件に巻き込まれたり、隠されていた事実気づいて、潜伏中の犯人逮捕の糸口をつかんだりする。時には不幸な囚人への同情から、彼らが悪に追い込まれた事情を探ることもあり、それらの行動の中で、起倒流の冴えた技を発揮する場合も少なくない。

第一話「雨上がり」は、仮病をつかった勝蔵に、伊四郎という男から分け前の金を受けとり、勝蔵の愛していた女おみつに渡してほしいと頼まれる話である。勝蔵はまもなく島流しと決まった男だけに、登も同情し、依頼を果たそうとしたが、小悪党の伊四郎はいったん渡した金を奪おうとして彼を襲い、おみつもその情婦だったと判明する。登は、男女の仲の複雑さを学んだのである。

3. 正義と悪

第二話の「善人長屋」には、はじめから、おちえが登場してくる。彼女は若い獄医を「登」と呼び捨てにし、いろいろな用を言いつける。猫が帰ってこないから探して来いとか、菓子屋からせんべいを買って来いとか、自分でやればいいのに登をこき使う。

彼はもちろんおもしろくないが、しかたなく用を足してやる。薬種屋の息子につけ文を届けてくれと頼まれ、登は手紙を黙って受け取るが、途中で破り捨ててしまった。

叔母があるときおちえのことを、「莫連」といった。登はそれを耳にして、おちえは莫連女の卵かもしれないと思った。彼にとっては手のつけられない娘である。

登は小伝馬町の獄舎で、ある男から自分は無実であると訴えられる。その男の

「娘があわれでならねえ。眼が見えねえ娘かが、何も知らねえで、あつしが帰のを待ってるんだ」⁷⁾

という言葉が気になり、その男をつかまえた岡っ引きの家を訪ねて、さらに眼の見えない娘が住む富川町の六右衛門店に行ってみた。登は憂世を見るのだ。

そこは「善人長屋」と呼ばれていた。住民がみな善人たちであるからだ。眼の見えない娘は、おちえと同じくらいの年頃で、親切な住人たちの世話を受けている。

しかし、登はそこにかえって腑に落ちないものを感じ、知り合いの岡っ引きに相談するうちに、善人長屋の正体が明らかになってくる。

事件が解決したときに、登は目の不自由なおみよという娘の行く末を思うのである。

登は従妹のおちえやその友だちと、おみよをひきくらべていた。おちえたちよりもずっと可憐で美しい娘に思えるおみよが、決してしあわせとは言えないことが、不当なものにおもえて仕方なかった⁸⁾。

立花登には、弱いものへのいたわりが常にある。若さゆえにすがすがしい正義感もある。女牢では、女たちに「先生、男前だねえ」とからかわれる。彼女たちは、登の弱者へのいたわりややさしさを本能的に感じ取っているのである。

第六話「落葉降る」の冒頭では、おちえは、だらしなく酔っ払い、登にびしりと顔を張られて泣き出してしまう。他愛がないといえば他愛がないが、

「いいんだ。あたし登なんか好きじゃないもの」⁹⁾

という言葉に、この青年に惹かれている彼女の気持ちが見えている。

叔父も叔母も、ゆくゆくは登とおちえを一緒にさせたいと思っている。叔父も叔母もそのことを時々口にして、登を当惑させる。第5話「風の道」では、次のようにいわれている。

だが登は、この美貌で姿のよい従妹に、あまりいい感じを持っていない。柔術仲間の新谷弥助などは、いずれ登はおちえの婿におさまるものだと思いついて、……登自身はまっぴらご免だと思っていた。¹⁰⁾

彼から見るおちえは、うしろ姿など十六の小娘にしては、実になまめかしい。わがままな美貌の遊び好きな娘とはとても思えないのである。しかし、

おちえは驕慢で、遊び好きな女だった。遊び好きは、似た年ごろの仲間もいて、仕方ないとも言えるが、美人が美貌を鼻にかけるのは興ざめする。美人は、言動つつましくしてこそ奥ゆかしいと思うのだが、おちえにはこのつつしみが無い¹¹⁾。

第七話「牢破り」の最後では、誘拐されて助けられるおちえは、もう一度今度は思い切り登に頬を張り飛ばされる。これをきっかけに、おちえは変化して行く。登が彼女を見る眼も、また変わってくる。彼女は、「あばずれ」から、次第に抜け出して行くのである。

さて、立花登が遭遇するのは、悪人ばかりの牢獄の事件であるから、ふんだんに悪があるということになりそうである。しかし、藤沢が扱うとそういう決めつけにはならず、無限の悲しみに満ちた同情や共感になることが多い。第4巻の第1話で「戻って来た罪」という作品がある。

もと獄にいた男が、昔共犯だった者で、本当に危ない男がいる。身代金を受け取ったのに、人質の子どもを平然と殺した。まだ捕らえられていないが、またやるだろうと言いついて残して病死する。

調べてみると、極悪非道なこの男はいくつか類似の犯罪を行いながら、逃げおおせている。何の罪ももたない幼児を殺害する犯罪であり、藤沢周平には珍しく絶対に許せない罪である。

しかし、男の逮捕後に、昔彼は自分の子どもを殺されて、それからおかしくなったのであり、初めから精神に変調を来たしていたのだろう、と作者は登に想像させている。そうすることで、こういう場合でさえ、悪人に対してわずかに救いを念じるのである。

同じ第4巻の第5話「女の部屋」という作品がある。

大店の主人が、腎臓の病で倒れ寝たきりになる。そのまだ若い美貌の妻は、夫の代わりに精一杯真面目に働く。しかし同時に禁欲に耐えかねて、適当に不倫もしている。そのことで、生活まで影響を持ち越すわけではなく、やむをえないともいえる状況であるが、ある日店の回転資金に困り、悪名高い同業者に融資を依頼する。男は深夜、融資の金を持って訪れるという。狙いが彼女の体であるのは明らかだが、それがわかっていて彼女は、別にそれくらいは構わないと決断する。

同衾中、かねての不倫相手だった手代が訪れ、彼女がレイプされているものと思い、驚きのあまり男を殺してしまう。そして島流しの刑になるが、憧れの女主人を救ったという恍惚の思いで、喜んで刑に服する。

しかし、彼女は事態を見抜いて問う登に、金を借りるとき、つまり体を与えるときに、

「ええ、そうです。あたしは新助が奥の私の部屋に来るのを、ついうっかり忘れていたんです」¹²⁾と明るく微笑むのであった。この美貌の妻こそ、実は藤沢がこのシリーズで描いた、唯一純粋な悪ではないのだろうか。

その後、偶然登が遠く見かけた彼女は、新しい若い手代と連れ込み宿から出てきたところであった。藤沢周平は、徹底したエゴイズムと重なるイノセントの罪もまたある、といているかのようである。

叔父の代診をするともに、小伝馬町の獄医に出ている登は、暗い牢屋の中に棲息する罪人たちの「病」を通して、市井の闇のその奥の闇に、直面しないわけにはいかないのである。

例えば、「囚人で、しかも悪人づらでも美人でもなく、ごく平凡な顔立ちの町娘」¹³⁾の痛む胃の診察から始まる。第三巻の第六話「影法師」では、市井の闇にひそむまさしく影法師のような男を、浮かび上がらせている。

娘の名は、おちせという。囲われ者だった母親おらくの旦那、加賀屋を刺して捕らえられた。二ヶ月前、母親が首を吊って死んだのは加賀屋の仕業、とおちせは思ったのである。加賀屋の嘆願が効を奏して、おちせは放免となった。

おちせを見送りながら登は、おちせの心から暗い激情が消えてくれればよいがと思う。

不しあわせな者には、いつかはしあわせになる権利がある、と多くの囚人を見てきた登は、思うことがある¹⁴⁾。

しかし、放免直後、おちせの周囲に妙な出来事が頻

発する。「おちせのまわりに、何となくすつきりしない、黒い影のようなものがまつわりついている」¹⁵⁾のを登は感じる。

問いただす登に、加賀屋は、ある男のことを話した。

「あの晩ですよ」

と加賀屋は言って、登に眼をもどした。

「路地の入口近くで、ひととすれ違いました。暗い晩で、王子屋に貸して提灯も持っていなかったものですから、顔も何もわかりませんでした。男でした。その男はあたしとすれ違おうといそぎ足に表の道に出て行きましたが、足音も立てず、まるで影法師のようでした。」

「ほほう」

「ほんとです。あたしや不気味な気がして、思わずうしろを振りむいたくらいです。そしてそのあと家に入って、梁からぶらさがっているおらくを見たのです。身体がまだまだなまあたたくて揺れていました。……」¹⁶⁾

男は、茶屋でもはや誰からも見向きもされない仲居だったおらくの、たった一人のなじみであった。おちせを可愛がり、まるで実の親子のようにしていたが、店が潰れて姿を消した。古手物の行商人の格好でおらくの前に現われてほぼ一年、男にすぎるおらくを殺し、貯めていた金を奪ったのである。

行方不明のおちせは、その男と暮らしていた。登たちが裏店の長屋に踏み込んだとき、二人は夕飯の支度で台所にいた。

棒立ちになる男。目の下がたるんだ、疲れたような四十男の顔に、一瞬すさまじい形相がうかんで、竈の中から火のついた薪をつかみ出すが、すぐに諦めたような表情で薪を竈に戻した。後ろ手に縄をうたれて男は出ていったが、おちせを振り向きもしなかった。「不しあわせ」が、幾重にも折り重なる物語であった。

4. 男女の仲

さて、立花登の気持ちは、少しずつおちえの方に動いていく。第2巻第2話の「幻の女」にこうある。

その広場は、八方の道が集まる場所なので、歩いて行く登の前後を、右往左往にひとが通りすぎて行く。その中に目立つほど姿がいい娘がいた。米沢町の路地から出て来て、御門の方に歩いて行く。そう思って歩きながら見送っていると、娘が振りむいてにやりと笑った。従妹のおちえだった。

「何だ、おまえか」

興ざめして登が言うと、追いつくのを待っていたおちえは膨れづらになった。

「何だとはなによ。誰と間違えたのよ？」

「まあ、怒るな」

登は苦笑した。……

「なに、間違えたわけじゃないよ」

と登は言った。

「なかなかの美人が歩いていると思ったら、おまえさんだった」

「そんなふうに言われても、べつにうれしくなんかない」¹⁷⁾

そうはいったが、おちえは機嫌を直したようであった。この「姿のいい」というのは、藤沢周平独特の表現である。物語がさらに進むと登は、

めずらしく、従妹のおちえの顔をみたい気持ちになっていた。男友だちと盛り場を遊び歩き、娘だてらに、酒に酔いつぶれたなどということもあるバカ娘だが、おちえは若くて、姿かたちならそんなじょそこらに見かけないほどうつくしい。登は急に渴くように、この若くてきれいな従妹に会いたくなっていた¹⁸⁾。

と考えている。おちえは、決して多くは登場しない。しかし、このシリーズの中で、実に大きい役割を果たしている。おちえは、立花登の感化により、女として変わって行く。登が、渴いたように会いたくなる娘に成長していくのである。

登が事件に巻き込まれると、おちえも手伝うようになって来る。以前には考えられなかったことであるが、藤沢周平はその変貌を見事に描ききっている。

さてシリーズを通して、おちえ以外で登に近い女の一人がおあきである。おあきは、従妹のおちえの遊び友だちである。

おあきは、おちえが次第に離れていく悪い遊びに引きかえすことなく入り込んで行き、登がしばらく見かけないうちに、ほとんどあくどいほどの濃い化粧をする女になっていた。

厚い白粉で浅黒い肌をすっかり覆い隠している。かつておあきは、登に戯れのように、「あたいと一度寝て」といったことがある。登はそれを、おちえに黙っている。

第3巻第5話の「奈落のおあき」は、タイトル通り、おあきが男と一緒に闇の梯子を降りて行く話である。おあきの惚れた伊勢蔵は、盗賊の一味で牢に入って、そこで人を殺したきわめつきの悪党であった。隠れ家

に登を連れてきたと知った伊勢蔵は、おあきに匕首を向ける。捕り物の後で、登はおあきと一緒に暗い夜道を歩く。

「ふむ、それでも男を逃がしてやるつもりだったのかね？」

「あたい、あのひとが好きだったもの。あたいにはやさしかった」

「しかし、伊勢蔵はお前を刺そうとしたぞ」

答えはなく、すすり泣きの声が洩れて来た。盗っ人の情婦か、と登は思った。おあきは、今人殺しの情婦でもあるのだ。お面のように白粉を塗りたくらなければ、生きてはいけまいと思った。おあきの細細としたすすり泣きが、二度と這い上がれない奈落の底から聞こえて来る嘆きの声のように聞こえた。

登は、立ちどまっておあきを待ち、そばに来ると肩を抱いて歩き出した。そしてわざと明るい声で言った¹⁹⁾。

「また、やり直ささ、元気を出すことだ」

おあきのいるすぐそばまで登は降りて行き、そして明るい声を出す。この言葉通りに、おあきは第4巻「別れゆく季節」では、豆腐屋の元気な若女房として、亭主の豊太とともに登場する。

豊太に背を抱えられて去るおあきを、登はじっと見送った。何かがいま終わるところだと思った。おちえ、おあき、みきなどがかたわらにうろちょろし、どこが猥雑でそのくせうきうきと楽しかった日々。つぎつぎと立ち現れて来る悪に、精魂をつぎこんで対決したあのととき、このとき。

若さにまかせて過ぎて来た日々は終って、人はそれぞれの、もはや交わることも少ない道を歩む季節が来たのだ。おあきはおあきの道を、おちえはおちえの道を。そしておれは上方に旅立たねばならぬ²⁰⁾。

他の登場人物とともに、登も成長する。叔父のように「いずれは貧者にもやさしい名医になるだろうとの予感」²¹⁾を残して物語が終わる。

5. おわりに

うだつの上がらぬ町医者としての叔父に、登は違った印象を持ち始める。腕のわりにはうだつが上がらないけれども、代わりに貧乏人から「先生」、「先生」と慕われている叔父に、秘かに共鳴する気持ちが登の中に生じたのである。

むろん叔父は、好んで貧乏人を診るわけではない。金持ちの病人が来れば、大喜びで診る。ただそういう病人は少なく、貧しい病人が圧倒的に多いというだけの話なのだが、いずれにしても叔父は金持ちも貧乏人も平等に診る。叔父が金の多寡で病人を区別したのを、登は見たことがない。そして、医の本来はそこにあるのではないかとも思うのだ²²⁾。

酒飲みであり、裕福とはいえないが、登はこの一点において秘かに叔父を尊敬している。叔父の跡をついでよいと思うのは、そういうときである。たとえ医者として名を挙げたとしても、それが富者や権門の脈をとるためだとしたら、ばからしいことであると思う。

この作品は、いわゆる捕物帳と似た構成をとっているが、小伝馬町の牢という特殊な場所を舞台とし、柔術の達人で、人道主義的な意識を持つ若い医者を主人公としたところに作者藤沢周平の工夫が見られるといえる。

しかも、登は良心的な医師として、牢では囚人からも信頼されているにもかかわらず、寄宿先の叔父の家では、叔母や従妹から、全く正當に遇されない存在である点など、読者にきわめて親近感の持てる人物として造型されている。

牢というのは、社会の「悪」と直接結びつく場所だけに、様々な暗い人間模様を潜ませている。登は、獄医という仕事を通してそれに接し、社会や人間の矛盾を感じるとともに、彼にできる範囲内において、問題の解決に取り組もうとする。

第1巻第3話の「女牢」では、彼を思慕していた不幸な女囚を、死刑の前夜に抱いてやったのも、その心の現われであろう。また、同じく第1巻第4話の「返り花」では、入牢中の御家人が妻からの差し入れで、中毒死したできごとの真相を追及した。第6話の「落降る」では、かねて知り合いのしっかりした娘が、恋人に裏切られ罪を犯す姿を、その父親の像とともにせつない思いで見つめる。牢の中で秘かに殺された男の背景を探り、謎を突きとめる第5話の「風の道」にも、そのような登の意識が描かれている。

囚人たちを見つめる立花登の視線は、作者のそれとも重なっている。彼らの中にはどうしようもない悪人もいるが、やむをえない事情で罪を犯したり、濡れ衣を着せられたりする者もいる。罪は裁かれねばならないが、小さな悪を追及して大きな悪を見逃す危険があるのも現実であるといえよう。

彼らは、ある意味では、社会の矛盾の犠牲者であるといえる。藤沢周平は、最も暗い場所である牢を取り上げ、それをめぐる人間の諸々相を描きながら、彼らを救う存在として、主人公立花登の人間像を設定したといえよう。

文 献

テキストは、下記の講談社文庫新装版(2002年発行)を使用した。引用箇所は、巻数をローマ数字、頁数をアラビア数字で表記する。

- I. 藤沢周平：春秋の檻 獄医立花登手控え (一)
- II. 藤沢周平：風雪の檻 獄医立花登手控え (二)
- III. 藤沢周平：愛憎の檻 獄医立花登手控え (三)
- IV. 藤沢周平：人間の檻 獄医立花登手控え (四)
- 1) 高橋敏夫：藤沢周平という生き方, p. 83 (PHP 研究所, 2007)
- 2) 川本三郎：闇の抒情、闇の無垢、別冊歴史読本第23巻第48号 藤沢周平読本, p. 48-49 (新人物往来社, 1998)
- 3) 新村出編：広辞苑 第六版, p. 740 (岩波書店, 2008)
- 4) I. 16
- 5) I. 17-18
- 6) I. 40
- 7) I. 54
- 8) I. 88
- 9) I. 217
- 10) I. 176
- 11) 同上。
- 12) IV. 276
- 13) III. 242
- 14) III. 257
- 15) III. 264
- 16) III. 282-283
- 17) II. 69-71
- 18) II. 186-187
- 19) III. 238-239
- 20) IV. 330
- 21) 月刊『望星』編：藤沢周平に学ぶ, p. 41 (東海大学出版会, 2006)
- 22) IV. 242